

## 北斎の肉筆画 一 版画・春画の名作とともに一

岡田美術館（箱根・小涌谷） 2020.05.30～09.27

本展は、「葛飾北斎」（1760～1849）の生誕260年記念として開催される特別展で、画伯の画業70年のうち40歳から晩年までの各時代を代表する肉筆画「11点」を中心に版画・版本、春画を含む「全17点」の作品をメインに、同館が収蔵する「北斎」の全作品が同時に公開されることで大いに注目されている。

展覧会の目玉は、50歳前後に描いた美人画の傑作《夏の朝》と個人蔵の《美人夏姿》の2作品が並列で展示され貴重な空間になっていることである。



「北斎」は改名癖から数多くの画名を名乗ったが、本作品は40後半～50代前半の作品であるされている。水盤に赤い金魚が涼しげに泳いで、鏡の蓋に置いた茶碗に朝顔が浮かんでいる夏の朝の情景であろう。

釣り衣桁（いこう）には男の着物がかかり、夫より早く床を出た新妻が、朝の化粧に余念ない姿であるように見受けられる。

一般の家庭婦人を描いた浮世絵美人画としては、最高傑作と評価しても褒め過ぎではない作品であると評価されている。

会期中は、「北斎」以外の浮世絵師による肉筆画や版画の展示があり、特に注目されるのは、2012年に約60年ぶりに再発見された「喜多川歌麿」の肉筆画《深川の雪》で、同時に《雪月花》三部作を構成するアメリカ美術館所蔵の《品川の月》、《吉原の花》の高精細複製画も同時に展示されている。

喜多川歌麿《深川の雪》



「歌麿画伯」の傑作とされる3部作は、縦2m、横3.5mの巨大な肉筆の浮世絵で、舞台は東京・深川にある料亭で27人の遊女や芸者が火鉢を囲んだり遊びに興じたりする姿が、生き生きと描かれているのが特徴の作品である。

喜多川歌麿「深川の雪」（部分）享和2年～文化3年（1802～06）頃 岡田美術館蔵